

Title	ネルヴァル的世界の成り立ち：時間・自己・物語(1)
Sub Title	Le monde d'après Nerval-Temps, moi, récit (1)
Author	水野, 尚(Mizuno, Hisashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.182(161)- 200(143)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ネルヴァルの世界の成り立ち

—時間・自己・物語— (1)

水 野 尚

時間は直線によって表象されるにせよ円環によって表象されるにせよ人間の生と緊密な関係にあり、世界内存在としての人間の在り方を規定している。またそれは物語の構成的契機でもあり、そこで展開される世界は必然的にある時関様態を帯びている。従って私たちは Gérard de Neval の自己と作品の存在構造を時間の存在論的・物語論的研究を通して明識しうるのでないだろうか。

(1) 存在論的時間

多くの存在論的時間論は冒頭から時間を二つに峻別し—それらは客観的時間と主観的時間等様々な名称が付与されるのだが—そのどちらか一方に優位が与えられた後に論考が進められる傾向がある。しかし空間化され数量化され非人間的と看做されるような時計に表示される時間も、内的・主観的・質的と呼ばれるような時間も実際には同一の現象⁽¹⁾についての異なる意識形体に由来するのであって、それらは錯綜しあいながら自己の存在様態と対応しているのではないだろうか。一方が他方を排除するのではなくむしろ顕在と潜在を繰り返す不規則な反復運動が二種類の時間の在り方であると⁽²⁾考えられる。一般にそれらの間には厳然たる質的差異が認められると誤想されているが、実際には時間ということを対象化した場合の自己の存立様態の相異の反映であり、従ってその異なった時間意識の考究を通して人間の自己性が明識されるとも言える。ここでは最初に各瞬間の間⁽³⁾のつながりが自明性を持たずに継起してゆく時間、次いで因果律が網の目を至

る所に広げている時間という二つの相の下で Neval 的時間・自己を討究してゆきたい。

通常時間は継起的に一方向に経過し、過ぎ去った時間は決して戻っては来ないものと考えられている。それは人間を否応なく死の淵に導く流れでありそこから人生の儚さ、時間の非情を歎く声が発せられる。と同時にまたその儚さゆえに尚一層この現在の時を享受しようという快樂主義も生まれて来る。従って快樂主義的時間観と絶えず死に直面している人間存在の不安を吐露する時間観の下には同一の時間意識が横たわっているのである。そしてこの時間意識に於いては「いまの瞬間」⁽⁹⁾は前後する瞬間とは何の関係も持たずに次々と連続してゆく継起的時間であると言え、それ故に自己の存在も瞬間毎に消滅の危機に瀕していると考えられる。私は以下の論考のなかでこの時間をクロノスの時間あるいは継起的時間と呼ぶことにしたい。それは因果律の規制を受けず、連続的に継起する時間の謂である⁽⁵⁾。

さて Nerval は Cuvier と大古の恐竜の化石について言及することがあるが、それは神の創造以来不変であると思われてきた生物の秩序・宇宙的な時間の固定的な視点の崩壊という同時代の認識を反映している⁽⁶⁾。人間が身近に感じる日常の時間だけでなく、世界全体を包摂している宇宙的時間も不動ではありえないという認識が Cuvier 以降一般に受け入れられ、この時代に至って人間の時間だけでなく宇宙的時間も流れるのだと諒解されるようになる⁽⁷⁾。そして時間は変化を産み変化は衰退と崩壊を齎す⁽⁸⁾。従って何一つ現在に留まることは出来ず、時間は未来から現在を通して過去へと不可逆的に流れてゆく。その上各瞬間の間には必然的な相互関係、例えば現在は過去の集積であり結果であるといった因果関係は見出されず、時間は非人間的に流れ去ってしまう。そこで Sylvie の伯母さんは姪の小さな恋人の美しい金髪を前にして「Cela ne dure pas」(I 253)⁽⁹⁾と呟く。現在は広がりを持たず durée を欠いており丁度「Coquillages de nos musées, où l'oreille attentive croit distinguer un vent sonore, mais la vie n'habite

pas.》(II 746)⁽⁹⁾のように空虚で実在を欠いている。〈時間はすべてを消滅させ〉〈人生は短く夢い。〉そして〈有限な存在(人生)は空しい。〉⁽¹⁰⁾このような時間の破壊作用を前にしている人間の耳に「いま將に到来する一瞬を享受しろ。」と命ずる悪魔の声が響く。

Les heures sont des fleurs l'une après l'autre écloses
Dans l'éternel hymen de la nuit et du jour ;
Il faut donc les cueillir comme on cueille les roses
Et ne les donne qu'à l'amour.
Ainsi que de l'éclair, rien ne reste de l'heure
qu'un néant destructeur le temps vient de donner.
Dans son rapide vol embrassez la meilleure
Toujours celle qui va sonner.
Aimez, buvez, le reste est plein de choses vaines
Le vin, ce sang nouveau, sur la lèvre versée,
Rajeunit l'autre sang qui vieillit dans nos veines
Et donne l'oubli du passé

L'Imagier de Harlem. C V 141-142⁽¹¹⁾

悪魔は現在の瞬間を享受する快樂主義に依って永遠を目指す創造者Costerの誘惑を試みる。過去を忘れ「l'heure qui va sonner」のみに身を委ね卑俗な愛と酒の魔力に呪縛されること、それが人間を絶えず脅かす死の恐怖から逃れる手段としての快樂主義である。ところでこの悪魔の言葉のなかで、クロノス的時間の本質が「l'une après l'autre」という表現で現わされている。継起する瞬間は、一つが到来すればそれ以前の瞬間は忘却されてしまう(l'oubli du passé)といったように、相互間に必然的な関係はなくただ順序通りに進行するのであり、そこには連続的な同一性が欠如している。

このような時間意識に支えられた自己はその同一性を確信しえず、存在の基盤が問題にされることになる。いまの自己といままでの自己との有機的な関係を見出しえない自己は、恰も一瞬毎に現前する自己が別々の存在であるかの如き印象を覚え、その存在の不安定性に怯え自己の存立機制を

問わずにはいられない。Nerval が “El Desdichado” のなかで «Suis-je Amour ou Phoebus?…Lusignan ou Biron?» (I 3) と自問するのは、継起する自己存在の連続性についての不安に由来する。彼はある瞬間には Amour であり別の時には Phoebus である。また Lusignan であった一瞬後には Biron でありもする。このように各瞬間毎に自己は別の自己に取って換わられ、しかもそれらの自己の間に同一性を見出すことが出来ない。

各瞬間が未知的相貌のもとに次々と連続する時間とは逆に、それらの連鎖が既知性・既存性を帯び「いまの瞬間」がいままでの結果でしかないような、換言すればいまにいままでが蓄積されているような時間がある。ここでは万物が対応し因果律の錯綜した網目に絡み取られており、クロノスの時間の最も簡明な表現が «l'un après l'autre» であったのに対して、この時間は «l'un à cause de l'autre»⁽¹²⁾ によって表現される。従ってそれに «カイロスの時間»⁽¹³⁾ という名称を与えたいと思う。それは因果律の緊密に張り巡らされた時間であり、その因果関係を創り出すのが人間自身であるが故に、カイロスの時間は人間的で内的な時間であると見做されることが多い。

Nerval 的世界でこの時間系に属する事象は列挙の暇が⁽¹⁴⁾無い。なぜなら Nerval の自己の存立様態は多くの場合既存性に基づいて現前しており、彼は諸事象を発見するのではなく再認してゆくからである。実際彼は旅先で見る街並や風物のなかに必ず既にどこか別の所で見たものを見出す⁽¹⁵⁾、またある建築物の下に幾世代もの建築物が埋まっているのを覚識したりする⁽¹⁶⁾。彼の世界では過去は消え去るのではなく深まってゆくのであり、あるいは人生の中葉にして幼年時代の追憶が回帰し、«le culte éternel des souvenirs» (I 187) とか «le sentiment profond du passé» (II 473) と口にした⁽¹⁷⁾りする。彼にとって文学作品の系譜は模倣の連続である⁽¹⁸⁾。このような既存の世界では森羅万象が一つの有機体を構成し各々が密接に対応し合っている。

rien n'est indifférent, rien n'est impuissant dans l'univers, un atome

peut tont disoudre, un atome peut tont sauver. (I 404)

万物は例外なく因果の連鎖で結ばれ、過去・現在・未来は確定的完了的な様態のもとで経験される。そこに於いては最早何も消滅しないのであるから、クロノスの時間に於いてあれ程恐れられた死さえもが絶対的なものではなくなる。

O malheur ! la Mort elle-même ne peut les affranchir (les peuples) ! car nous revivons dans nos fils comme nous avons vécu dans nos pères. (I 404)

この因果律世界の中心に位置するのは自己である。ここでは指輪に手を触れると教会の蠟燭が灯ったり、指輪を大水のなかに飛ば込むと大洪水が治まったりするのだが、それは心的な想念が直接物理的な事象と繋がっているからであり、物質と精神、客観と主観の垣根が取り外されているようでさえある。自己は世界との境を失い自然と一体化し、因果律の連鎖が自己を中心として世界の隅々にまで拡散してゆく⁽²²⁾。

Tout vit, tout agit, tout se correspond ; les rayons magnétiques émanées de moi-même ou des autres traversent sans obstacle la chaîne infinie des choses créées. (I 403)

またここではクロノスの時間に於いて分裂し同一性を見出しえないでいた自己がその統一を回復したと確信する。

Du moment que j'avais cru saisir la série de toutes mes existences antérieures, il ne m'en coutait pas plus d'avoir été prince, roi, magie, génie et même Dieu. (I 151)

しかしこのような自己の拡張は二つの重大な結果をもたらすことになる。まずこの超因果律の世界の内部では必然的に個別性が失われ全てが普遍的な様相を帯びることになり、また自他の区別が為されなくなるために、自己は他者との接触が不可能となり自らを刷新することが出来ないと⁽²³⁾いう事態に陥る。もし人間が時間内存在であることを止めうるならば彼は自己の狭隘な輪のなかで充足感を味わうことも出来よう。しかし彼が世界内存在である限り時間の継起から逃れ「いまの瞬間」に留まることは出来⁽²⁴⁾

(147)

ない。従って Nerval は “Ce que j'écris en ce moment tourne trop dans un cercle restreint. Je me nourris de ma propre substance et ne me renouvelle pas.” (I 1120) と嘆ぜざるをえなくなるのである。いま一つの結果は、自己が宇宙の中心であり神自身となっているのであるから、その役割に対して遅れを取らないように過剰の義務を遂行しなければならないのであるが、時間内存在である人間にとってそれは不可能なことであり、そこから自責感・罪責妄想が生ずるということである。既存的世界の時間の経過は「所有の喪失」を引き起こす誘因となり、もし喪失が実際に起ったと感知された場合それは全ての秩序を崩壊し、自己を支えていた基礎を根底から覆えすように感じられる。⁽²⁵⁾それ故 Nerval は “Il est trop tard.” と繰り返し culpabilité に付き纏われる。ところで “Il est trop tard” という意識は具体的な状況によって惹起されるのではなくむしろその意識が状況に先立つことに注意しなければならぬ。⁽²⁶⁾実際彼は旅行中に時間に遅れることに驚くべき無関心を示し時計との競争は彼の内部にいかなる苦悩もかき立てはしない。むしろ彼にとって遅れる時間が書く対象を発見する時間なのであり、それは彼の創造性に結びついている。⁽²⁷⁾《Il est trop tard.》と発する時には従って時計の表示する時間に遅れるのではなく、自分自身に対して遅れを取ることに對しての焦燥であり、その苦悩が自責の念を導き彼の作品世界を陰鬱なものにしていく。⁽²⁸⁾

私はこれまで瞬間の連鎖が未知性を帯び単に継起的にのみ進行する場合とそれが既知的な様相を呈し《いま》がいままでの因果関係の結果として到来する場合を考察して来た。そこでは一方は前後関係が他方は因果関係がその要件をなし、Nerval はその時間意識の交代に従って存在の不安に怯えるか罪責妄想に苦しんだ。しかし悪魔の快樂主義的誘惑のうちにもプロメテウスの欲望のうちにも永遠の瞬間が垣間見られたに違いない。なぜならクロノスの時間にせよカイロスの時間にせよそれらは《いまの瞬間》を前提としており、逆に言えば《いま》が時間の源流としていままでといまからを分泌して時間の流れを産出し、その流れの存在様態がクロノスの

あるいはカイロスの的でありうるのである。従って《いまの瞬間》の解体は時間の解体ひいては時間内存在の時間からの解放を意味し、そこで永遠の現在が感知されうるのである。例えば祝祭の熱狂のさなかで忘我の状態にいる時、あるいは夢現の状態で自己が別の姿でその存在を続けようとする一瞬にある時、そのような時自己と森羅万象が融合し喪失の痕跡のない原初の調和が出現し、《永遠の現在》が垣間見られる。しかし人間が時間内存在である限り《いまの瞬間》に停まり永遠の瞬間を持続的に享受することは出来ない。従って Nerval は必然的に時間の流れる世界に戻り、継起する時間と因果律的時間の間を後者に傾きながら揺れ動くのである。⁽³⁰⁾

注

- (1) 例えば「時計時間」と「自然時間」(ロイ・ポーター)コリン・ウィルソン編著『時間の発見』三笠書房。「自然的時間」と「経験的時間」マイヤー・ホフ『現代文学と時間』研究社、ベルクリンの「空間化した時間」と「純粹持続」の区別等。
- (2) 木村敏氏は優れた自己・時論論『時間と自己』(中公新書)に於いてこの時間ともの的時間の共生関係を確説している。しかし他方それらを峻別する観点が墨守され、ことがもの化する場合の機制が分明にされていないためにこと＝主観、もの＝客観の伝統的な二分法から脱却していない。つまりもの的な捉え方をされた時間も物象化される以前には自己の存立様態の一反映であることに留目しなければならないと考えられる。
- (3) 私がここで《いまの瞬間》と名付けることは空間的に定位を持つ点ではなく、有名なアウグスチヌスの時間論から付度されるように運動であると同時にその痕跡なのであり、またフッサールの時間論に於いて「源意識」と呼ばれている事態と同義である。さらにそれはサルトルの言う«présence à soi»の時間的側面であるとも考えられ、木村敏氏は自己の自己性と関係づけて《いま》の存立機制を明確にしている。時間意識の基礎となるこの《いまの瞬間》については別の機会に詳しく論じたいと考えている。
- (4) G. Poulet “Etudes sur le temps humain” Plon は各瞬間の間の不連続な継続を持続に変質させる意識の変遷を時代的に論考している。しかし(その)瞬間の構成機制についての視点は全く欠けている。
- (5) 川端柳太郎氏は『小説と時間』(朝日選書)に於いて、F・カーモードの定義に従いながら、時間の継起を基礎とし、各瞬間の間に「何の意味も人間的な興味もなく、ただ空虚に二つの現象が継起し、過ぎ去っていくだけの時間」

- (p 24)をクロノスと名付けている。
- (6) C・ウィルソン前掲書。p. 52
 - (7) 文学者たちは「la mémoire affective」を通して永遠の瞬間を覚識するかあるいは「la continuité sentie」を把握するかという二つの方法によって永遠の喪失に反逆を試みる。Poulet 前掲書。p. 32-44
 - (8) Poulet “Trois essais de mythologie Romantique” José corti «qui se trouve inscrit dans le présent, se trouve entraîné dans ce que le présent devient, et s’en va, de changement en changement, vers la vieillesse et vers la mort.» p. 51
 - (9) I, II は各々 Gérard de Nerval (Œuvres, pléiade の 1 巻・2 巻を指す。
 - (10) 真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店 p. 2-13
 - (11) CV, (Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval tome V を指す。
 - (12) P. Ricœur “Temps et récit” Seuil p 65-70 アリストテレス『詩学』(世界の名著 8 アリストテレス・中央公論社) P 303
 - (13) 川端氏はクロノスの時間を「チック・タックの合間に意味が充填され、チックの生き生きとした期待と継起する事件をすべてタックに結びつけようとする感覚を持続している時間」(P27)と看做す。
 - (14) K. Schärer “Thématique de Nerval” Minard p 49-118
 - (15) J.P. Richard “Géographie magique de Nerval” in “Poesie et profondeur” Seuil p. 15-19
 - (16) Œ I 370 cf I 228, II 166-167 etc.
 - (17) M.J. Durry “Gérard de Nerval et le mythe” flammarion p. 7-10
 - (18) Œ I 191 cf I 130, I 132, I 143 etc.
 - (19) I 239 cf I 116
 - (20) I 396-397
 - (21) I 399
 - (22) T. Todorov “Introduction à la littérature fantastique” p. 113-130 Seuil.
 - (23) Poulet “les métamorphoses du cercle” p 284-289 Editions du rocher.
H. Susini-Costantini “Gérard de Nerval et l’expérience du temps” p 407 Revue de la Méditerranée, n° 4-5 t 19 1959
 - (24) J.J. Rousseau の場合 «De quoi jouit-on dans une pareille situation ? De rien d’extérieur à soi, de rien sinon de soi-même et de sa propre existence, tant que cet état dure on se suffit à soi-même comme Dieu.» Œuvres complètes I Pléiade p.1047 彼はてんかん気質であり、発作の状態においては自己性が解体し、上述の体験を享受しうる。
 - (25) 木村敏：前掲書 P 99-132

- (26) ビンスワンガー『うつ病と躁病』みすず書房 P 33-36
 (27) II 12と注2 (II 1276-1277)
 (28) 特に“ Aurélia ” 二部2章3章
 (29) 木村敏 前掲書 P 32-62
 (30) Sarah Kofman : Nerval, le charme de la répétition. L'Age d'homme p. 23

(2) 物語論的時間

上述した二重の時間様態は自己の在り方であると同時に物語の構成的契機でもある。語り手の役割は構成すべき出来事を潜在的な無数の出来事のうちから選択しそれらを一定の秩序に従って配列することである。一方組み立てられた物語は単に出来事が一連の順序に並べられているだけでなく一貫性を持った統一体として構築されている必要があり、そこでは出来事が互いに明確な因果関係で結びつけられていなければならないと考えられてきた。ところで私たちは一般に継起的に連続してゆく出来事の流れるようなクロノスの時間を物象化し自己とは無関係に流れてゆく客体的なものと看做す傾向にあるのだが、出来事もその時間内で次々に生起消滅してゆく。そして伝統的な物語ではそれらを必然不可避な秩序に従って全体が統一性を有するように組み立てなければならないとされてきた。そこではクロノスの世界から幾つかの事象を選択してカイロスの秩序に配列することが問題であった。他方時代が下るに従って作品世界にもクロノスの世界を再構成しようとする技法も見られるようになり、現実を〈ありのままに〉写し取ることが課題とされた。この二種の物語構成上の時間に応じて形成された世界は存在論的時間のところでは論考した二重の世界現相と対応する。そして Nerval の場合奇妙なことに存在論的時間の様態は大部分既存のであったのに対して、物語の時間構成ではクロノスの時間も伝統に反して大きな役割を果たす。

伝統的な物語は記述されている出来事が一つのまとまった全体性を示し、かつそれらすべてが確固たる因果関係で結び合わされていることを要求する。ここでいう「全体」とは「始めと真中と終りを持つものこと」

である。そしてこれらの契機によって構成される全体は統一性を持たなければならぬ。物語は「行為の描写である以上、描写される行為は統一性を持ったひとつの全体でなければならない。そして出来事の諸部分を組み立てるにあたっては、そのどれひとつを他の場所に移したり取り去ったりしても、たちまち全体が動かされてばらばらに解体してしまうような、そのような緊密な構成を物語にあたえなければならない。」⁽⁶⁾従って伝統的な物語が構成する世界は、存在論的時間に於いてカイロスの時間内に在る人間を取り巻く世界と同様な、超因果律的構造を内包しているといえる。そして出来事を因果関係で緊密に結びつけ統一性のある全体を構成するためには、語り手は語るべき対象から一步身をひいてクロノスの時間に於いて継起する諸事象をそれらの生滅とともにではなく事後的に選択し、それを再構成 (recomposer) しなければならない。再構成とは一連の出来事に《The Sense of an Ending》⁽⁷⁾を与えることである。従って Nerval が《Recomposons les souvenirs》(I 248) と口にする時、その言葉は彼が語る対象から距離⁽⁸⁾を置いていることを示すと同時に物語全体の統一的構成をも意図していることを銘記する必要がある。彼は無限にある潜在的な思い出から幾つかを選び出しそれらを物語の時間的継起と因果律に従って配列するのであるが、再構成するとはその意味で全体的統一性を志向していると考えられる。そして再構成された物語はその全ての要素が《l'un à cause de l'autre》という風に連続しながら最終の点へと飛来する。ところでカイロスの時間構成を有する物語は Nerval によれば常に結婚か死で終わる。

Il n'y a que deux sortes de dénouements, le mariage ou la mort.
(II 338)

では Nerval の散文作品のうちで結婚か死で結末を迎えるものが希であるという事実は何を意味しているのか。そのことは彼が演劇よりも伝統に縛られていない散文に於いて因果律的循環世界とは別種の世界を構築しようと意図していたことの現れではないだろうか。存在論的地平において彼は既存性に拘泥する傾向が強かったが、散文作品構築にあたってはむしろ伝

統から逸脱してクロノスの時間を作品の構造的契機に据えようとする。そこで彼の作品はしばしば伝統的なジャンルに分類することが出来ないと言われることになる。

紀行文や“les Nuits d'Octobre”等のなかで Nerval は継起する出来事に因果関係を与えず次々に順序通りに記述してゆこうとする。そしてそのような物語では「始め」も「終り」も行きあたりばったりであり、また「真中」も脱線の連続で統一など望むべくもないような印象を与える。伝統的な物語では語られる出来事は選択され因果関係に従って配列されるのだが、ここでは選択も為されず起こったことは何もかもが作品に詰め込まれているように看做される。アリストテレスはこのような物語に激しい批難をあげせる。「単純な物語と行為のなかでは、挿話的な性格のものが最も悪い。「挿話的な性格の物語」というのは、その物語の中でいくつかのエピソード(劇を構成する主要な出来事)どうしの続きあいが、いかにももっともだと思わせる関係にもないし、必然的な関係もないような、そういう物語のことである。」⁽⁹⁾しかしこのようなまとまりのない出来事の継起は私たちが日常生活で感知している時間継起と相即的なものであり、«l'effet de combinaisons bizarres de la vie» (I 80)を表現するためには伝統的な物語よりもむしろ「挿話的な性格の物語」の方が相応しいとも考えられる。⁽¹⁰⁾従って Nerval はこの効果を実現するために継起的事象を«dagueréotyper»⁽¹¹⁾すると主張し、目に写ったままを忠実に描写しそのままの順序で並べてゆこうとする。

quant à celle (aventure) dont je te parlais plus haut, je regrette bien de ne pas t'en avoir écrit les détails à mesure. (II 46)

«écrire à mesure» は «recomposer» とは対照的な創作態度であり、描写する対象に対して批判的距離を置かず、出来事をその生起する時点で次々に (l'un après l'autre) 記述していく技法である。語り手はここでは物語の全体が把握ぬまま書き進んでゆくから緊密な統一性を持った全体など構成できるすべもないことになる。そして物語全体を見渡してその混乱した出来事の集積のなかから因果関係を見出すのは読者の役目であり、

読者は日常生活のなかでクロノスの時間をカイロスの的に変質させるのと同様に、物語の継起的時間に区切りをつけ各々の部分に異なった重要性を与え、因果関係の織物を織り、物語の意味を作り出してゆかなければならぬ⁽¹²⁾。

ところでアリストテレスは物語の対象に対しても「作家(詩人)の仕事は実際に起こった出来事を語るのではなく、もっともな成行きまたは必然不可避の仕方⁽¹³⁾で起こりうる可能事を語ることだ。」と規定している。そして実際に起こった出来事を語るのは歴史家であり、作家は起こりうる可能事を語るのだとしている⁽¹⁴⁾。しかしここで重要なことは、実際には作家が可能事を語るのではなく、彼が出来事を因果律的な関係にあるように配列するからこそ物語が必然不可避の仕方⁽¹⁴⁾で起こりうる可能事になるのである。その逆ではないということである。つまりノエシスの契機とノエマの契機は相互規定的であり、何かを語るという場合、語られる対象は二重であって語る行為を規定すると同時にそれによって規定される。また歴史家は実際に起こった出来事を扱うと論定されているが、その出来事の存立機制を問えばその基盤は一般に考えられているような堅固なものではない。ある事象の様相が観察者の位置する系に従って変化することはアインシュタイン以来の通論であり、事物は確固たる実在を持って在るのではなく、それがそう見えるように⁽¹⁵⁾ (voir-comme) あるいは何物かとして (als etwas Anderes)⁽¹⁶⁾ 在るのである。例えば“*Aurelia*”一部9章のなかで自分の分身を見た語り手はこう呟く。

Quoi qu'il en soit, je crois que l'imagination n'a rien inventé qui ne soit vrai, dans ce monde ou dans les autres, et je ne pourrais douter de ce que j'avais vu si distinctement. (I 381)

彼は分身をはっきりと見、その実在を疑うことは出来ないけれど、いわゆる現実世界にはそれが実在したという痕跡を確認しえない。あるいはそれは通常の認識からは異常とされる事態である。しかし個人的認識と一般的認識とのずれは実は各人が絶えず逢着している。そしてそのずれが分明になった時には個人的認識を一般的認識に従わせることによって私たちは社

会生活を送っているのだが、もし個人的認識をあくまで優先させれば狂気のレッテルが貼られかねない。物語の次元でこの認識論上のずれは現実と虚構という形で顕在化する。個人の認識が一般的認識と食い違う場合にはそこで語られる出来事は虚構と看做され、逆の場合には現実に起こった出来事として認知される。しかし実際には物語られた時点でその二つの区別は消滅し、出来事が現実に起こったかどうかではなく、むしろそれが起こりうる本当らしさを持っているかどうかの問題となる。従って物語る行為の対象をその实在性によって区別するのは無意味であり、アリストテレスの言う意味での物語と歴史の対象の差は存在しないことになる。物語られた出来事が本当か作り話かの確認は意味をなさず、“les Nuits d’Octobre”の21章に出てくる批評家はメリノの髪の娘の实在を確かめるために Meaux に行こうとはしない。

Que m’importe que vous ayez couché à la syrène, chez le valois ? Je présume que cela n’est pas vrai, ou bien que cela est arrangé : vous me direz c’aller y voir... Je n’ai pas besoin de me rendre à Meaux ! (I 109)

つまり

Or, le vrai, c’est le faux, du moins en art et en poésie. (I 109)

従って認識論的見地からすれば «recomposer les souvenirs» と «daguéréotyper la vérité» の対象の差異は存在しないことになる。そしてこれは特に強調しなければならないことなのだが、この二つの記述様式の違いは偏にカイロスのかクロノスのかに依っているものであり、その時間が描写 (mimèsis)⁽¹⁷⁾ された対象の存在様態を規定するのである。

これまで私は二つの物語論的時間を画然と分離して扱って来たが、個々の作品はそれらの間を振動しながら展開し、カイロスの時間が優位になれば伝統的物語の極に近づくし、クロノスの時間が物語の多くの部分を占めた場合には「挿話的な性格の物語」の極に近づいていく。ここでは“les Nuits d’Octobre”を分析的に討究してゆくことで二つの時間の振動を考

祭してゆきたい。

“Les Nuits d’Octobre”は réalisme という概念を中心に展開する。物語の冒頭で Dickens の “la Clef de la rue” という題名の記事を読んだ語り手は、イギリス人は«chapitres d’observation dénués de tout alliage d’invention romanesque» (I 79) に満足するけれどフランス人はそれが «anecdotes et histoires sentimentales—se terminant soit par une mort, soit par un mariage» (I 80) で飾られることを要求すると歎き、小説は «l’effect des combinaisons bizarres de la vie» (I 80) を表現するだろうかと反語的に問いかけた後 «vous inventez l’homme, ne sachant pas l’observer» (I 80) と付け加える。つまり彼のいう réalisme の鍵をなすのは観察であり、その対象を忠実に記録してゆくことである。ところで Dickens は観察の «材を lower class にとった⁽¹⁸⁾» が、Nerval も彼に倣⁽¹⁹⁾て夜のパリの裏街の怪しげな情景を記録してゆく。しかしここで彼の視点から記述の時間的契機が抜け落ちていていることに注目しなければならない。つまり réalisme に則って目に写るがままを描写し «raconter votre vie pas à pas» (I 105) することはその対象を chronologique に次々と記述することでもあり、そのようにして構築される世界にはクロノスの時間が流れることになる。作者 Nerval は対象の奇矯性に目を奪われ作品構成上の時間を意識していないが、脱線と道草の連続で統一性を欠いた挿話的な性格の物語と看做されがちなこの作品も、時間論的観点から考察すれば一箇所を除いて継起的時間に忠実に従っている。その上物語は十月の三夜の忠実な記録であると言われるがその三夜という限定に必然性はなく、物語の「始め」と「終り」あるいは「真中」が必然不可避な方法で結びつけられているとは言い難い。従って “les Nuits d’Octobre” の支配的な時間はクロノス的であると確説しうる。

さて «表面的な現在⁽²¹⁾» である三夜を具体的に考究すると、全体で26章あるこの物語は第一夜1章から15章、第二夜16章から21章、第三夜22章から26章までと分割され、さらに第一夜は7章と8章で前後に下位区分される。物語は Meaux 行きの小旅行を思いついた主人公が汽車に乗り遅れる

ことから始まり、偶々友人と出会って話をしているうちに次の汽車も逃してしまふ。彼は翌朝の7時まで暇を潰さなければならなくなり友人と二人夜通しパリの場末を彷徨しそこに生息する奇怪な人間達の生態を具に観察することになる。第一夜はこのようにして翌朝 Meaux に旅立つまでが描かれるのだがここでは Dickens 的 réalisme に倣っているともいえ、また前半の幾つかの divagations は Diderot 風 réalisme の反映であるとも考えられ、汽車に乗り遅れて暇潰しをしている二人の友人の会話といった雰囲気なかで全く関係のないように見える挿話が次々と語られていく⁽⁸²⁾。後半は夜の裏街の描写であり語り手の目に写るがままの現実をその順序に従って記述してゆく。彼はまず L'ancien Athenée (8章)に入り次にフリーメーソンの集会(9章)に潜り込みその後焼肉屋(10章)中央市場(11章)インノサン市場(12章)へと進み、そこの回廊(13章)を通過して Baratte(14章)に達し最後に Paul Niquet の店(15章)に出かけ、明け方警察の手入れから逃れて停車場に向かう。描写された情景の奇異な様相のために忘れられがちであるが上述の記述は chronologique に進行し、かつ各々の場面の間に必然的な関係は見出せない⁽²³⁾。しかし第一夜の後半にはこのクロノス的時間にある意味を与えカイロスのしようとする試みもみられる。つまり語り手は le Paris obscure である Pantin に潜入する直前に «Plongeons-nous plus profondément encore dans les cercles inextricables de l'enfer parisien» (I 88) と公言するが、これは夜の彷徨を地獄下りに喩えることで継起する場面に一連のつながりを与え、純粋な観察を地獄下りの物語に変質させようとする試みであると考えられる。

第二夜に至って語り手は réalisme から完全に離反する。その夜はメリノの髪娘の出る見世物の場面とその印象によって惹起される夢から成り立っているのだが、ここで特に注目し値するのは物語を通してこの部分でのみ語り手の順序の逆転が見られることである⁽²⁴⁾。何故 «les sensations étranges du sommeil qui succeda à cette soriée» (I 104) の方が夜会の描写に先行して語られるのだろうか。まず現実と夢の関係に留目すると、語り手は «Mon esprit, surexcité sans doute par les souvenirs de

la nuit précédente, et un peu par l'aspect du pont des Arches, (...), imagine le rêve suivant (...).» (I 104) と明言しているように、それらが単に継起的に連続しているだけではなく因果関係にある。また語り手の頭痛は前夜ビールとパンチを飲み過ぎたからかもしれない、その印象が地精たちによって頭を金鎖で叩かれるという表現になっていると推測される。故にそこでは出来事の前後関係よりも因果関係の方が重要な役割を果たし、カイロスの時間がクロノスの時間に代って顕在化している。そのことは語り手が «Recomposons nos souvenirs» (I 107) とか «le métier de réaliste est trop dur à faire» (I 109) とか口にしてのことからも彰らかであり、第二夜の物語は伝統的な物語の範疇に近づいている。そしてここでは語りの順序の逆転が重要な意味を持つことになる。夢の中で地精たちは «les cornes de cette femme ne sont pas telles que l'avait dit le saltimbanque: notre Parisien est encore jeune... Il ne s'est pas assez méfié du boniment» (I 105) と歌う。一方現実にメリノの髪を娘の前にしている語り手は «Enfin, la femme aux cheveux de mérinos parut dans toute sa splendeur. C'étaient effectivement des cheveux de mérinos.» (I 110) と記し、それが人種の混血によって作られたのだろうと臆度したりする。しかしたとえ彼女が出る夜会のポスターが実在したとしてもメリノの髪をした人間などというものは実在し⁽²⁵⁾そうもなく、夢の視点が本当らしければそれだけ、語り手の現実認知が疑わしいものに思われてくる。従って夢を現実に先立って語ることは、夢それ自体の問題よりも現実認識の問題を強調する機能を果たし、この逆転が意味あるものとなっていることが理解される。

第三夜では物語は Crespy の監獄のなかで見た夢も含めて全てが chronologique に語られていく上、各々の場面の間に必然的な関係も見られない。しかし他方では物語全体を統合しようとするカイロス的意識もみられ、例えば主人公が «Fantaisiste! réaliste!! essayiste!!!.» (I 116) と批難される夢のなかで三夜の行動が簡潔に要約される。

On commence par visiter Paul Niquet, on en vient à adorer une

femme à cornes et à chevelure de mérinos, on finit par se faire arrêter à Crespy pour cause de vagobondage et de troubadourisme exagéré!... (I 116)

このように第三夜は前の二夜を踏まえた上でクロノスの時間とカイロスの時間を融合しようとしている。ところで Nerval がこの作品を5回に分けて⁽²⁶⁾ L'illustration 紙に発表した時、最初はこの第三夜は彼の構想に入っていなかったのではないだろうか。それは、Paris-Pantin-Meaux という副題、地獄（煉獄）についての言及が第三夜には見られない、22章になって唐突に旅行の本当の目的地が Creil であると言われる、等のことから明らかであろう。彼は夜のパリの場末のおどろおどろしい光景を「dagueréotyper」することで一種の地獄下りの物語を語ろうとしたのであって、réalisme は lower class を描くための口実であったのかもしれない。しかし物語を書き進むにつれて彼の興味は描写すべき対象よりも描写の方法とその結果に移行していき、「la vérité」と「le vrai」の錯綜した関係が彼の関心を最も引きつける問題となったのである。⁽²⁷⁾そしてその方法論的問題意識が彼の筆を先に進ませたと考えられる。従って第三夜は二つの時間意識の調和の試みであり、語り手は物語の最後に至って「Vailà l'histoire fidèle de trois nuits d'octobre, qui m'ont corrigé des excès d'un réalisme trop absolu ; j'ai du moins tout lieu de l'espérer.» (I 118) と付け加えるのである。

以上の如く“les Nuits d'Octobre”は二つの物語論的時間の間を振れ動きながら「cet affreux mélange de comédie, de rêve et de réalité」(I 107)を織りなしていく。そしてその二つの時間の交代が物語から構成される Nerval 的自己を異なった様式で脅かすのである。つまり第一夜はクロノスの時間が流れているために彼の自己の不安定性は déraciné のそれであり、次々と継起する場面の間に連続的の同一性が感じられない。⁽²⁸⁾あるいは第一夜を一種の地獄下りと見るならばそれは「Qui suis-je?」という問に対する答を探求する物語であるとも言える。それに対して第二夜に流れるのはカイロスの時間であり、ここでの自己性の危機は対象の不安定性

に由来し、メリノの髪の娘の関する認識論的な問題が Nerval 的自己の不安を惹起し、彼は自己の自己性よりもむしろ狂気の問題に係わることになる。⁽³⁰⁾そして第三夜に於いては自己の不安定性は身分証明書を忘れたために逮捕されるという形で表現される。このように“les Nuits d'Octobre”のなかで時間・自己・物語は相互に密接に関連しながら、Nerval 的世界を成り立たせているのである。

以上時間と自己・時間と物語という二つの軸にそって Nerval 的世界の存立様態を概括的に考察してきたのであるが、今後この論考で扱うことの出来なかった認識論的問題を中心にして Nerval 的世界の不安定性を浮き彫りにしてゆきたいと考えている。

注

- (1) “le récit fait paraître en un ordre syntagmatique toutes les composantes susceptibles de figurer dans le tableau paradigmatique établi par la sémantique de l'action.” Paul Ricoeur 前掲書 p. 103
- (2) “Une histoire (...) doit être plus qu'une énumération d'événements dans un ordre sériel, elle doit les organiser dans une totalité intelligible, de telle sorte qu'on puisse toujours demander ce qu'est le «thème» de l'histoire” 同上 p. 102
- (3) 川端氏はクロノスの時間がその前後関係を保持しながら因果律的な必然性を帯びていく過程を文学史的に考察している。
- (4) ここで言うありのままとは、描かれた対象がそのように見えるように記述する文学的な技法のことである。
- (5) アリストテレス 前掲書 p. 299
- (6) 同上 p. 299-300
- (7) “la configuration de l'intrigue impose à la suite indéfinie des incidents «le sens du point final» (pour traduire le titre de l'ouvrage de Kermode, *The sens of an Ending*). (...) c'est dans l'acte de re-raconter, plutôt que dans celui de raconter, que cette fonction structurelle de la clôture peut être discernée.” Ricoeur 前掲書 p. 105
- (8) M. Jeanneret: “Ironie et distance dans les Filles du Feu” *Revue d'histoire littéraire de la France*. 1-3 1973 p. 32-47
- (9) アリストテレス 前掲書 p. 302

- (10) 川端氏は前掲書のなかで、モーパッサンとヴァージニア・ウルフの論を引用しながら、小説の時間処理の方法の変化を簡明に記している。(p. 213-215)
- (11) R. Chambers “Gerard de Nerval et la poétique du voyage” José Corti p. 307-312 また I 89
- (12) W. イーザー『行為としての読書』岩波現代選書 p. 45-66
- (13) 前掲書 p. 300
- (14) このことから、歴史家は一回的・個別的な出来事を扱い、作家は一般的・普遍的な事象を対象とするという区別もなされ、創作はこのゆえに歴史より哲学的であり、価値多いものであるという判断が下される。そしてこの区別はエリアーデの聖なる時間と俗的時間、神話と歴史のそれに対応している。
- (15) Ricœur 前掲書 p. 120-122
- (16) 廣松 渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房 特に p. 21-45
- (17) アリストテレスの用語。
- (18) 齊藤 勇『イギリス文学史』研究社 p. 441
- (19) Nerval 自身は彼の読者である Ludovic Picard 宛の手紙のなかで «une sorte d'imitation satirique de Dickens» (I 1064) と語っている。しかし彼の意図がどうあれ、彼が réalisme の時間契機に従ってパリの裏街を記述していることにはかわりはない。
- (20) Jeanneret “la lettre perdue” Flammarion p. 42. R. Chambers 前掲書 p. 322 大浜 甫 ネルヴァル論考 24『十月の夜』形成昭和54年7月 p. 52
- (21) マイヤーホフ 前掲書 p. 51-52
- (22) J. Richer はこの部分について «Il faut bien reconnaître que les sept premiers chapitres du récit sont nourris de peu de matière et semblent un peu déçousus.» (Nerval: Expérience et création, Hachette, p. 404) と批判する。
- (23) ここで «repas différé» のテーマ (Jeanneret) や «changement» のテーマ (Chambers) を付与するのは読者の役目であり、読者がクロノスの時間をカイロスの時間に変質する。
- (24) Jeanneret “Ce renversement de l'ordre temporel normal confère au rêve une position privilégiée.” 前掲書 p. 35
- (25) I 109
- (26) 1852年10月9日23日30日11月6日13日
- (27) “«le vrai est ce qu'il peut.» (...) Mais la vérité, c'est qu'il n'en est rien.” (I 111)
- (28) アリストテレス前掲書 p. 298
- (29) “cette parodie de descente aux enfers est aussi une exploration des régions obscures du moi.” J. Richer 前掲書 p. 403
- (30) I 107
- (161)